

天霧城跡発掘調査概報

—香川県善通寺市・多度津町・三野町所在の中世山城の調査—

1997. 3

一市二町天霧城跡保存会



はじめに

ひとにぎりの土くれ、たなごころの小石、そこに中世のロマンが語られ、戦国の勾いがただよっています。

それが、山城の跡天霧です。

かつて

比左加多能阿万起利也末仁布流由岐者

幾美賀千登勢遠津満武東寸良舞

と詠まれた名峰天霧は、今は黙して語りませんが、数々の歴史を宿し、今昔の想いを秘めて静かに時の流れを見つめているのです。

その閉ざされたペールの中の語り部に、現代の光芒をあてて、いにしえを物語らせるのも、今日の命題といえるでしょう。

天霧城跡発掘調査団は、そうした現代の願いをこめて、善通寺市、多度津町、三野町の一市二町天霧城跡保存会を母体として結成されました。

天霧の今に、幾百年の昔を語らせようという発掘は、昭和56年春から夏にかけて延々 122日に及びました。

急坂で時余を要する東方尾根に、連日本を携えての苦闘を続けた延 1,850人に及ぶ人たちの労苦が、この報告書につわものどもの夢のあとをしのばせてくださったのです。

とりわけ、心をこめてこの発掘作業に協力下さった地元の方々には本当にお世話になりました。心から御礼申し上げたいと存じます。

香川氏の居城として威を誇った天霧の城跡も、星霜と共にこれからも変わらずいくことでしょう。

この報告書が、そうした歴史の流れの中で天霧の昔をしのび、人間の営みの尊さを語るよすがともなって、後世の史学に多少でも裨益できればと心から祈っています。

この調査に指導助言をいただいた方々、協力援助をいただいた方々、多くの方々に心から感謝申し上げございさつといたします。

調査団長 佐柳 正

例　　言

1. 本報告は、昭和56年度におこなった善通寺市碑殿町に所在する天霧城跡東方尾根の調査概報である。
2. 調査の実施に際しては、天霧城跡発掘調査団（団長 佐柳 正）を組織し、香川県教育委員会より担当技師 2 名の派遣を得た。また、調査期間中に辻村建設・善通寺市吉原町自治会の協力を得た。
3. 遺構・遺物の実測・写真撮影及び絵図は調査担当者が分担したが、他に佐藤佳代子・奈良大学学生片桐孝浩の協力を受けた。
4. 本書の執筆・編集は齊藤賢一・藤好史郎が担当し、次のように分担した。

I 調査に至る経過	齊　藤
II 調査の経過	藤　好
III 遺構について	藤　好
IV 遺物について	齊　藤
V おわりに	齊　藤

(天霧城跡発掘調査団名簿)

團　長	善通寺市教育委員会教育長	佐　柳　正
副團長	一市二町天霧城保存会会長	大　岡　俊　謙
〃	香川県教育委員会文化行政課副主幹	松　本　豊　胤
調査委員	一市二町天霧城保存会副会長	白　川　武
〃	〃	大　坪　小三郎
調査員	香川県教育委員会文化行政課	齊　藤　賢　一
〃	〃	藤　好　史　郎
事務局	善通寺市教育委員会社会教育課	石　井　秀　文

目 次

はじめに	
例 言	
目 次	
I 調査に至る経過	2
II 調査の経過	3
III 遺構について	4
IV 遺物について	25
V おわりに	36

挿 図 目 次

図 1	調査区全景
図 2	発掘調査工程
図 3	調査参加者
図 4	天霧城跡と調査区域
図 5	調査区と丸亀平野
図 6	調査区全景
図 7~11	第1郭関係写真
図12~15	第2郭関係写真
図16~21	第3郭関係写真
図22	第4郭関係写真
図23~26	第5郭関係写真
図27~31	第6郭関係写真
図32	第7郭関係写真
図33~40	第8郭関係写真
図41~48	トレンチ関係写真
図49	P 1・P 3・P 4 地区出土土器
図50	P 5 地区出土土器

図51 P 6 地区出土土器

図52 P 7・P 8・P 9 地区出土土器

図53 土師質土器分布図

図54 鉄製品・銅製品

図55 古錢拓影

表 目 次

表 1	土師質土器區別表
表 2	古錢一覧表
表 3	遺物觀察表①~⑤

図 版 目 次

図版 1	染付(外面)
図版 2	染付(内面)
図版 3	土師質土器底部(糸切りとヘラ切り)
図版 4	雁股鉄・刀子・切羽
図版 5	釘・戸締り金具・不明鉄器
図版 6	鉄鍋

付図 1 天霧城跡東方尾根調査区東部
付図 2 " 西部

I 調査に至る経過

中世城郭の研究は、基本的には文献の研究から始められる。その成果に基づいて現地踏査がおこなわれ、研究が進展する。天霧城跡の場合もこの例に洩れず、地元研究者の地道な努力にその始原が求められる。しかし、城跡の広大な範囲が城の繩張りを確認することすら阻んでいるのが現実であった。

そうした折、昭和43年11月頃より天霧山南麓の善通寺市碑殿町で採石作業がおこなわれはじめた。その規模は年々拡大の一途を辿り、山頂部や尾根上にある城跡の遺構に重大な影響を及ぼすようになった。この事態に対応するため、昭和49年2月に善通寺市・多度津町・三野町からなる一市二町合同委員会が発足した。この組織を軸として保存運動を進め一方、城跡の重点部分をほぼカバーする測量調査がおこなわれ、概略を把握することができた。(注1)

しかし、これらの調査・研究はあくまで表面観察に依るものであり、自ずと限界をもつていた。研究をより深化させるためには発掘調査が必須条件であるが、中途半端な発掘はかえって遺構の破壊につながる恐れがある。このため、過去に県内でおこなわれた山城調査に於いても、遺構の保存には十分な注意が払われている。こうした観点に立ち、天霧城跡においても極力現状保存を前提として対策措置をとってきた。

一市二町天霧城跡保存会を中心とする運動にもかかわらず、東方尾根上の遺構は漸次崩壊しはじめた。このため、一市二町天霧城跡保存会・県教育委員会・業者が協議をした結果、三者の分担出資により崩壊の危機に直面している地域の全面発掘調査をおこなうこととなった。調査の成果に基づき保存措置を検討することとし、県教育委員会の援助のもとに「天霧城跡発掘調査団」が組織された。調査は、昭和56年4月20日に開始し同年8月26日に終了した。

(注1) 秋山忠「天霧城跡調査の概要」『讃岐天霧城を探る』一市二町天霧城保存会 1980, 1.

(注2) 県内でおこなわれた最近の山城調査の報告には以下のものがある。

「勝賀城跡」高松市教育委員会 1979, 3.

「勝賀城跡II」高松市教育委員会 1980, 3.

「益寝城跡発掘調査概要」長尾町教育委員会 1980, 3.

「屋島城跡」高松市教育委員会 1981, 3.

II 調査の経過

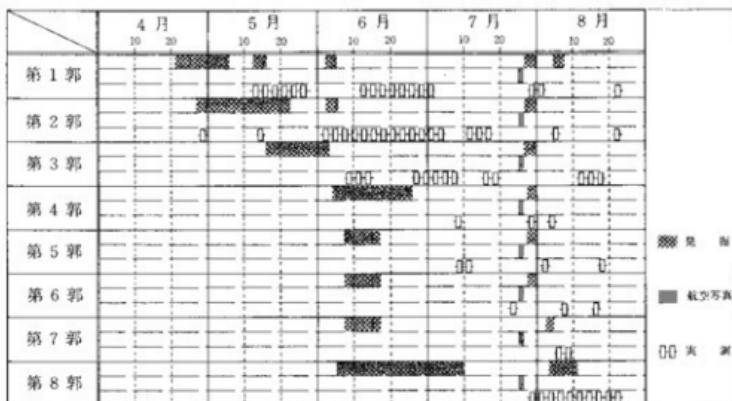


圖2 發掘調查工程

4月 14日、県庁にて一市二町保存会、辻村建設（業者）、県の三者で発掘調査の実施についての打ち合せ。15日、天霧城跡発掘調査予定地において伐開範囲などの確認。20日、調査開始。

5月 第1郭・2郭・3郭の発掘作業を继续。調査区東端の第1郭の東部石垣、礎石などの実測。調査区における二次堆積は尾根筋の平坦部では非常にうすく、斜面部では比較的厚く堆積している。

6月 2日、第2郭・3郭間の掘り切り部より1/40の縮尺で平板測量を開始する。上旬、第3郭以東の遺構面検出作業がほぼ終了する。中旬、雨のため現場作業不能な日が多い。29日、石壁の西部で礎石を検出。

7月 2日、各郭の測面の石垣の実測を開始する。17日、遺構面の検出作業がほぼ終る。25日、天候などの都合で延期されていた航空写真の撮影を実施。27日、セクションベルトに沿ってトレチを設定。

8月 7日、第8郭の北側で腰郭が検出される。先月撮影した航空写真のアングル不良のため再度撮影する。20日、発掘作業は終了し、以後残りの実測を行う。26日、図面の確認作業をし、本日で発掘調査は完了した。



図3 調査参加者

III 遺構について

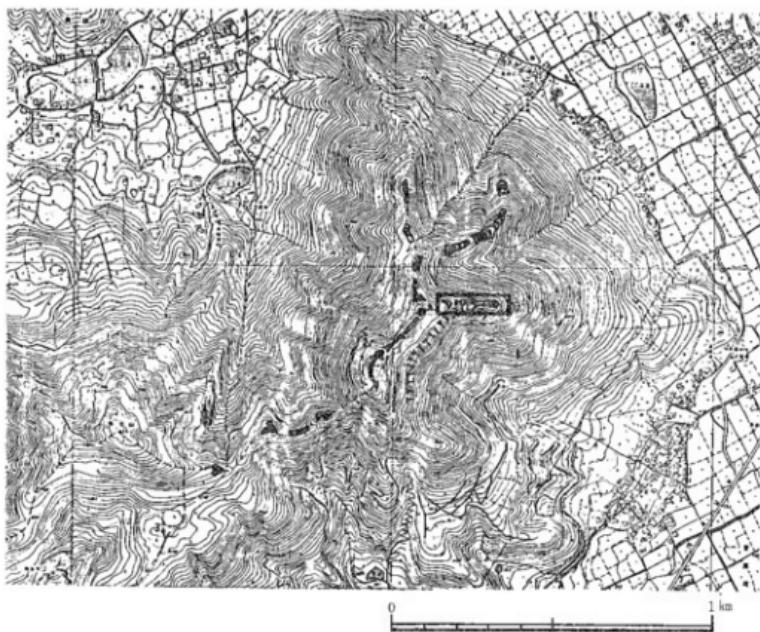


図4 天霧城跡と調査区域 (■内)

今回実施した発掘調査の対象地は、本丸が位置する天霧山山頂の北部にある三角点から東に派生する丘陵に位置する。以後東方尾根と称する。東方尾根にはその稜線上に郭群が営まれている。調査対象地はこの稜線上の 306m ~ 335m に相当する部分である。

東方尾根は山麓の東西神社から天霧山頂へ至る登山道があり、城跡の大手が位置する尾根とも考えられてきた。発掘調査の結果大きく見て 8 基の郭が検出された。郭は天然の急斜面を利用して、稜線上に営まれるが各郭ともに規模、付属の施設など様々な特徴を有しており、単に平坦面が連なるものではないことが判明した。

調査対象地の南部はすでに採石のため消失している部分がかなりあり、また郭平坦面を中心にして盗掘を受けていることが予想されたにもかかわらず調査により得られた成果は大きい。

発掘調査はすでに実施されていた測量調査による成果にもとづいて計画・実施した。調査の都合上、尾根の東端に位置する郭から西に向って、第1郭・第2郭と便宜的に呼称し、最上部の郭を第8郭とした。調査対象地全域を 1/40 の縮尺で、発掘と併行して地形測量を実施し、適宜縮尺を変え細部の実測が必要な箇所をおぎなった。

図5 調査区と九鬼平野



図6 調査区域全景
(北東に伸びる尾根から)



第1郭 調査区東端の郭で、南北約21m、東西約11mを計る。西部を弦とする半円の平面形を呈している。地山の削平とその際生じた破碎礫を盛り上げることで平坦部の面積が確保されている。遺構面における岩脈は南部で多く露出している。第2・3郭と東西方向の中心軸が一致することから、北部へ破碎礫を盛り上げることで郭の位置と規模が決められたことがうかがわれる。

郭の周囲の斜面部には土留めを目的とした石垣が直線的に多角形状に配置されている。石垣の上には石垣とは礫の大きさ、積み方とも明瞭に異なる破碎礫が積まれている。

* 第2郭の東側面中央部には表面が風化した露出岩脈である巨石が2石ある。洞石間はえぐら



図 7 第 1 郭礎石群
(東から)



図 8 第 1 郭礎石群
(西から)



図 9 第 1 郭西部石組み
及び第 2 郭東斜面部
石垣北半
(東から)

図10 第1郭東斜面部石垣（北東から）



図11 第1郭南斜面部石垣（南から）



れ、その中央部に柵状の石が置かれる。対応するようにその前面に礎石が配されている。礎石間は東西約2m、南北約1mである。他郭の礎石と比較しても異常に大きい石を用い、周囲からは近現代の瓦・漆喰・寛永通宝などの遺物が出土しており、城跡よりも後に營まれた施設である可能性が高い。敷の南と北の縁辺に沿い、南部は地山整形の緩斜面が、北部は石組の石壠が第2郭から第1郭へ伸びている。

第2郭 南北約12m、東西約25mを計る長方形のプランを呈する。郭のほぼ中央部を東西に岩脈が走っている。地山の削平と破碎砾を斜面の石垣の上に積み上げることで郭の平坦部は確保されている。第2郭東部では岩脈はやや南部にずれており、そのため東側面は南半は地山整形、北半は石垣の上に破碎砾を積み上げることで比高差を設け第1郭と画されている。南北の側面



図12 第2郭及び掘り切り部（西から）



図13 第2郭・第3郭間の掘り切り（南から）

も石垣とその上部の破碎礫とでなっている。

北斜面には傾斜が緩やかな部分が第2郭東端から西へ伸びる。

郭の西は掘り切りで第3郭と区されており、掘り切りに接して枠形状の施設が検出された。施設は地山整形とその上部に礫を積み上げた石壘を組み合わせることでなっている。掘り切りと第2郭を隔てる石壘及び掘り切り北部から第2郭内部への進入を非直線的なものにしている「L」字形の石壘である。前者は掘り切りに接して南北の方向を有する。後者は掘り切りに接する第2郭の西北部に始まり、北縁に沿って約4m伸び、直角に南へ折れまがる。

第2郭に限らず郭の上面は驚くほど平坦に築造してあるにもかかわらず石壘の基部には部分的に郭面よりも高い標高を有する岩脈の露頭をそのまま利用している。このことは郭が築かれる前に繩張が面密に実施され、平坦にすべき箇所は完壁に削平し、石壘相当部は削平の対象から除外されたことを意味している。第2郭で郭面上に露出している岩脈は郭東端中央部の2石

があり、その北部には、比高差こそないが、他と比較すると破碎礫のみが東側面に平行して認められる所がある。2石間のえぐれは後世のものの可能性が高く、第2郭の平坦部東端には岩脈の露頭を利用した石壠が存在した可能性もある。

石壠の上部が欠損しているとは言え、石壠自体と郭面との比高差は少なく単独で機能したと考えづらい。おそらく石壠上に柵状の施設が存在したと考えられる。

郭中央の南寄りの部分には郭の長軸と一致して東西の方向を有した礎石と考えられる石列が検出された。約20cm程の大きさの礫が平坦面を上にして、約160cm間隔で4石並び、その東方にも間隔は異なるが同一直線上に2石が検出された。郭の北部にも南部で検出された礎石群とは方向がやや異なるが一直線に並ぶ列石が検出された。いずれの列石も一方向のみ確認できただけであるが、郭の南北の縁辺とはかなり離れていること、礫が平坦な面を上にして単独で並ぶことなど柵列に伴う施設とは考えにくい。

第3郭 東部は掘り切りで第2郭と画され、西部は上位にある第4郭と地山整形の段差で画さ



図14 第2郭南斜面部石壠（南東から）



図15 第2郭北斜面部
(西から)



図16 第3郭以東部
(西から)



図17 第3郭南東部石壘、
掘り切りに通じる
通路状造構(西から)

れている。東西約33m、南北は広い所で約11mを計る。南西部が採石のため破壊を受けている。郭のはば中央部を東西に岩脈が走る。北側面は岩脈の上に土留め石垣を配し、その上部に破碎礫を積んでいる。南側面は岩脈が露出している所が多く、部分的に石垣を配し破碎礫を積む。

第2郭との境にある掘り切りは通路としての機能を有するが、採石のため第3郭の南側面下部までしか残っていない。ただ採石が行われる前まで麓からの道がこの掘り切りまでつづいており、「うま道」と呼ばれていたという。

掘り切りに接する部分には第2郭とよく類似した施設が検出された。郭の南東部には掘り切りやそれにつながる通路と郭を隔てるために、郭の縁辺に沿って石壘が「L」字形に設けられている。また郭北側面の石垣も東部で狭くなっている。それと対応して郭平坦面の北東部は一段低くなっている。この段差部と石壘の間には岩脈が露頭した巨石がある。この露頭した巨石もまた石壘などの施設の一部として利用された可能性が高い。郭西北部にも低い石壘がある。

図18 第3郭南部「うま道」
(南西から)



図19 第3郭西部石壙
(西から)



図20 第3郭北部石垣
(東から)



図21 第3郭南部石垣
(南から)





図22 調査区第4郭以西
(東から)

第4郭 東西約19mを計る。南部は採石のため大幅に削り取られており、南北の幅は不明である。郭の残存状況は非常に悪い。郭東部は地山整形により第3郭と比高差が設けられている。郭西部は東部と比較してそれほど明瞭なものではないが、第5郭東部に南北の方向を有した礫があることや、礫の東部でやや段差があること、北部の石垣が第5郭と連続していないことから、南北の方向を有した礫の東までとした。ただし第4郭の大半が消失した状況では不確定な要素が多く、第5郭との関係を明らかにすることはできなかった。

郭の北側面は石垣を配し、上部に破碎礫を積み上げている。郭の平坦部はほとんど消失しており、その上部の施設は不明である。

第5郭 東西約21mを計る。南部は採石のため削り取られており、南北の幅は不明である。東は第4郭とそれほど明確に画されているものではないが、前記したように南北の方向を有する礫からとする。西は地山整形による段差により第6郭と画されている。

郭の西北部には第6郭から伸びた石壘が築かれている。石壘の残存度は、他に比較して非常に良好であり、断面は台形状を呈する。地山整形と破碎礫を積みあげることでなっている。石壘上面の郭平坦面に対する比高は約50cm前後を計る。比較的残りの良いこの石壘においても、この程度の比高差では機能的に充分なものであるとは考えられない。石壘の上面の精査の結果柱の根石状の配石が部分的に認められた。石壘の上には柵列などの施設があった可能性が強い。

石壘は、第5郭の内部施設や側面の石垣などとも相互に関係をもつていている。北側面の石垣は石壘より東部では北に拡張されており、石壘がある第5郭西部より広い平坦部を有する。

一方石壘に囲まれた郭の西部には、上面が平坦な約20cm程度の礫が等間隔に配置されている。建物の礫石と考えられる。石壘と平行して東西方向に10石、石壘と直交する南北方向に6石が並ぶ。いずれの方向においても礫石間は1mを計る。ただ郭の南部が削除されているので、南北方向の礫石中にはすでに消失しているものもあると考えられる。建物の規模は5間×9間以上と考えられる。これらの礫石とほぼ同様の形状を示す礫が中央部で検出されていることもあ

図23 第5郭・第6郭及び
掘り切り
(西から)



図24 第5郭櫻石及び石塁
(東から)

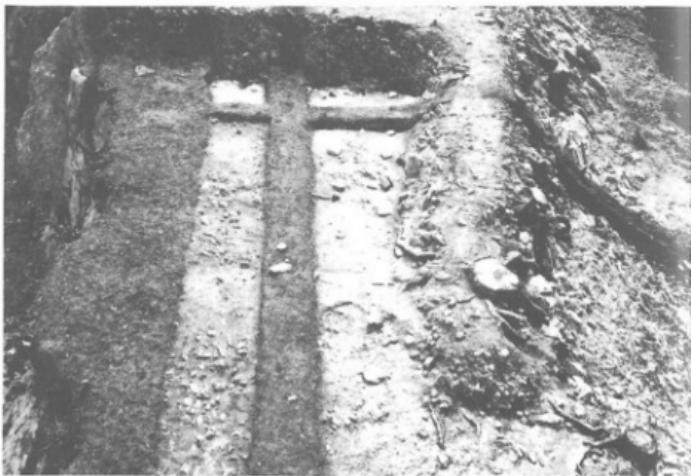


図25 第5郭西部
(北から)

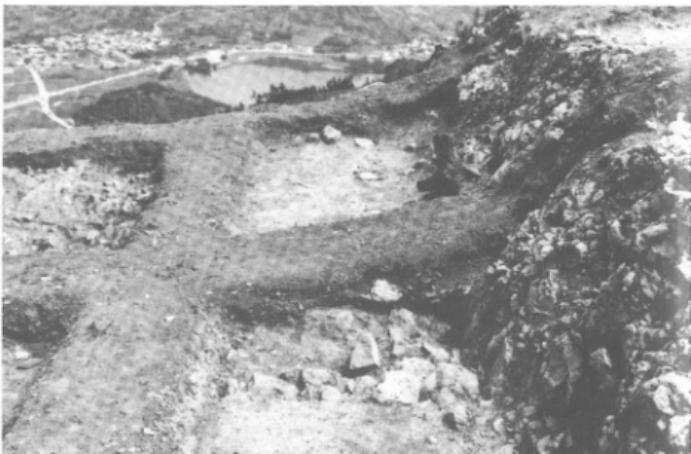




図26 第5郭北部石壘断面（南西から）

り、当初存在していた礎石が消失していることも考えられる。

礎石の規模は第2郭で検出した礎石とはほぼ同様なものである。第2郭・第5郭の礎石と比較して第1郭の礎石は異常に規模が大きく、しかもその周辺からは近現代の遺物が多く出土した。これは第1郭の礎石が後世のものである可能性が高いのに反して、第2郭・第5郭の礎石が城跡に伴うことを示していると考えられる。なお第5郭の礎石群と石壘、石垣との位置上の密接な関連と、その周辺からはほとんど近現代の遺物が出土しなかったことも、時期を考慮する上で重要な点であろう。

第6郭 東西約6.5mを計る。郭の南部は消失しているが、現状では南北約11mを計る。第5郭のすぐ西に位置する郭で、第5郭とは地山整形による段差で隔たっている。西は浅い掘り切りにより第7郭につらなる斜面部と切り離されている。第5郭と郭の主軸方向は一致し、第5郭北部の石壘上面と第6郭の平坦面とは比高差はない。第6郭平坦面北部が幅80cm程度で東へ伸び、石壘となっている。西部は地山整形と破碎砾を積み上げた石壘で掘り切りと隔たっている。この石壘の北部は明瞭に基部と中位部に石垣を配置することで、その形状を保っている。

削平により形成された郭平坦面には安山岩の角礫を含んだ凝灰岩風の岩が上面をのぞかせているが、ことさら何らかの施設の一部とは考えられず、他に礎石と考えられる明確な施設は検出することはできなかった。

第6郭の西には浅い掘り切りが設けられている。第2郭・第3郭間の掘り切りと同程度の規模の掘り切りである。南部は採石により消失している。これらの掘り切りは、隣接して設けられている石壘上部に柵列が設けられたとしても、他からの進入を確實に遮断するには充分なものではない。むしろこれらの掘り切りは他との連絡用の通路であり、これに接する郭部に遮断用の石壘が設けられていると考えるべきであろう。事実この掘り切りは尾根を横に切っているものの、北部は枝わかれした幅50~60cm程度の狭い平坦面が尾根の北斜面に沿って両方向へ

図27 第6郭西部石壘
(東から)



図28 第6郭西部石壘
(北から)



図29 第6郭西部石壘
(北から)





図30 第6郭西掘り切り
(南から)



図31 第6郭西掘り切り
(北から)

伸びている。ただ20m程で平坦面は不明瞭なものとなるが、通路としては充分なものであったであろう。

掘り切りから別れた通路状の平坦部が、どこに連絡しているかが問題となる。確認した範囲ではこの通路状の遺構は320mの等高線に従うように西へ伸びている。第7郭、第8郭へ連なるものではない。おそらく北へ伸びる尾根上に配置されている郭と連絡する通路状の遺構であろう。



図32 第7郭（東から）

第7郭 東西約10m、南北約8mを計る。それほど広い郭ではない。郭の周辺はやや緩やかな斜面で開まれており、そのためか石垣を配置せずに破碎礫を盛り上げた部分と地山整形により平坦面は形成されている。破碎礫を直接盛り上げたのは、土止め用の石垣を設けなくとも、傾斜がゆるやかなため、それほど高く盛り上げる必要がなく、崩壊する恐れが少なかったことによるものであろう。郭の西半は地山整形による平坦部の上に、ベッド状に破碎礫を敷き、一段高くしている。

郭南部には露出した岩脈があり、それをを利用して破碎礫を積み上げることで石塁が築かれている。規模は小さいものである。

第7郭と第8郭とは斜面で隔たっており、その斜面中程の部分から第8郭北部へ伸びる通路状の施設がある。

第8郭 調査区西端に位置する郭であり、東西約10m、南北約22mを計る。南北に広い郭である。地山整形と石垣を基部に配置した地山整形によりなっている。地山の削平は他の郭に比して大きく、郭西部には削り残された安山岩の岩肌がそびえている。第7郭以東の郭が地形にも制約されて、多少の差はあるが丸亀平野の基部に向っていたのに対して、第8郭は明確に丸亀平野の中央部と相対峙するように築かれている。これは単に地形形状の制約によるものとは、地山削平の規模的な大きさから考えづらい。第7郭以東の郭においても、地山の削平と土止めの石垣を用いて破碎礫を積み上げることで、旧地形の制約を取り除き、郭の主軸を一致させている箇所が認められる。第8郭の方向は築造時にかなり意図的に決定されたものであろう。

郭平坦面東北部の縁近くに、郭の方向と一致した配石がある。使用されている礫は25cm以下のもので、平坦な面を上にしてはいない。数個ずつでまとまりがなく、柵列の根石であろう。ほぼ160cm程の間隔でわずかにカーブを描いて配置されている。郭の中央部付近はほぼ削平さ



図33 第8郭（東から）

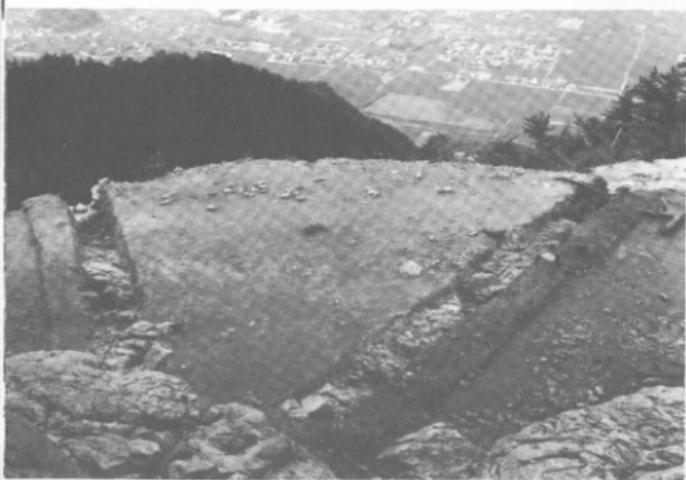


図34 第8郭（西から）



図35 第8郭北部石垣
(北東から)

れた岩盤の露頭面であるが、柵列の礫より大きく、平坦な面を上にした礫が数個認められ、建物の礎石の可能性がある。

郭の上面で観察される岩脈はその中心を郭のやや南よりの部位にもつ。それと対応して破碎礫を支える石垣は、東北部を中心として明瞭に配置されている。石垣は多角形状に折れ曲って配置されている。直線を基調とした石垣配置では、第7郭以東の全ての石垣と共通しているが、第8郭の北西部と南東部の2箇所に郭内部に切り込むように折れひずんだ配置の石垣がある。北西部の折れひずみはその北部にある腰郭状の施設と対応している。

第7郭と第8郭の間は岩脈が露出した斜面からなっており、斜面の途中から幅1m前後の通路状の平坦部が第8郭の石垣に沿って、腰郭へと続いている。腰郭状の施設は南北2.4m、東西7.2m程を計る。西から東へゆるやかに傾斜している。北部は大きな礫を一、二段積み上げて石垣としている。東部は第8郭の石垣の折れひずんだ部分と破碎礫上部に東に面をそろえた石垣状の部分からなる。南部は30cm程度の小形の礫を積み上げ、石垣としている。西部は石垣と考えられる施設は認められない。

腰郭状の施設は第8郭へ切り込むように配置されており、第8郭に付属する施設とするべきであろう。第7郭の上部から通路と考えられる狭い平坦部が連なり、腰郭自体も北部と南部は明確な石垣を有するが、東部と西部にはやや貧弱である。また郭自体も傾斜していることから、第8郭への進入を制御するための施設と考えるべきであろう。

図36 第8郭北腰郭部検出前（東から）



図37 第8郭北腰郭部堆積土礫層（西から）





図38 第8郭北腰郭部
(西から)



図39 第8郭北部石垣
石組状況 (西から)



図40 第8郭北部石垣
(北東から)



図41 第Ⅰ郭東西トレントレンチ東部（南から）



図42 第Ⅰ郭南北トレントレンチ北部（東から）



図43 第Ⅰ郭南北トレントレンチ南部（東から）



図44 第Ⅱ郭東部南北トレントレンチ北部（東から）

図45 第2郭西部石壘断面（南から）



図46 第3郭西部南北トレンチ北部（北から）



図47 第7郭北東部トレンチ（東南から）



図48 第8郭東西トレンチ東部（北から）



小 結

城跡が立地する天霧山は、その周囲を急峻な斜面で囲まれており、天然の要塞と言っても過言ではない。城跡は地形を最大限に利用して築かれている。東方尾根に立地する郭群もその例外ではない。今回実施した東方尾根の発掘調査により明らかになった事柄を遺構の面からまとめてみたい。

調査対象地を含む東方尾根は標高 360m の三角点から東へ伸びる尾根である。東方尾根の調査対象地には大きくみて、8郭が位置する。いずれも稜線上に位置し、平坦な郭の上面には削平された痕跡が明確な岩脈が認められる。東方尾根も他の天霧山の他の地域と同じく急峻な斜面で囲まれている。郭は、その急峻な斜面を利用して營まれる。その構築に際して急斜面を生かしながら郭の面積を確保することに、留意していることが窺われる。各郭は地山の削平とその際生じた破碎礫を周間に盛り上げておらず、郭の周囲には石垣が設けられており、使用されている礫の大きさ及び、配置の規則性でその上部に盛り上げられた破碎礫と識別される。石垣のほとんどは一段ないし二段に積み重ねられており、比高差よりも、その重量を利用して上部の破碎礫を支える目的で配置されている。この両築造法により各部の平坦部の面積は確保され、旧地形を利用しながらも郭の規模、方向などを計画的に決定している。第1郭から第3郭までの郭は上面の岩脈の線が必ずしも一致していないにもかかわらず、東西方向に一直線に主軸方向を同じくして配置されていることからも、繩張りの計画性が伺われる。

石垣は直線を基調として配置されている。第1郭上面の平坦部が半円形を呈しているのに対して、その周囲の斜面基部に配置された石垣は直線状に配置された石垣を重ねることにより多角形状を呈する。第1郭だけではなく他の郭においてもこの特徴は認められ、特に折れひずみのある第3郭北側面東部、第5郭北側面、第8郭の周囲の斜面において顕著に認められる。

各郭間は地山削平や石垣の上部に盛り上げた破碎礫による比高差を有する段、掘り切り及び、旧地形の斜面部で隔てられている。

掘り切りは第2・3郭間と第6郭西部にあり、いずれも浅いものである。第2・3郭間の掘り切りは南へ通路状に伸びており、第3郭の南部で採石による破壊のため消失している。この掘り切りへは以前麓からの道があり、「うま道」という名称がつけられていたという。大手かどうかは別にしても注目される。この掘り切りは浅いものである点や道につながる点からして、第2郭と第3郭を隔てるよりむしろ麓からの道の到着点とするべきであろう。第2郭と第3郭の掘り切りに面する部所には進入を制御を目的とした枠形の石壘が配置されている。第6郭西部の掘り切りも第2・3郭間の掘り切り同様に浅いもので第6郭と西を隔てるよりも通路とするべき性格が強く、枝別れして北方の尾根へ向って伸びる。北方の尾根との連絡に重きを置いたものであろう。この掘り切りも南部は採石のため消失しており、旧状は不明である。

石壘は、配置された部所により大きく2種類に分けられる。前記した掘り切りなどの施設に面する部所に設けられるものと、郭の西に位置する上位の郭から、郭の縁辺に沿って伸びる

ものとがある。前者は、第2・3郭の枠形状の石壘、第6郭西部の掘り切りと平行する石壘が相当する。いずれも築城前の露岩や地山整形による基底部に破碎礫を積み上げることでなっている。第6郭西部の石壘はさらに土留めのために石垣を基部と中位部に配置しており、残存状況が比較的良好である。後者の石壘の中で残存状況が良いものに第5郭北部の石壘がある。第6郭上面から比高差なしに第5郭の北縁に沿って東へ伸びる。第5郭の上面との比高差は約50cmを計る。これは石壘の南半が整形された安山岩の岩脈であることによる。北半は土留め用の石垣の上に破碎礫を積み上げている。これほど残存状況は良くないが第1郭北部と南部、第3郭北西部、第7郭南部、第8郭北西部と南西部に石壘状の施設が認められる。ほとんど露岩もしくは整形された岩脈をその基底部として利用している。第1郭南部の石壘はすべて地山整形によるもので幅が広く第2郭との連絡用の通路にも利用されたと考えられる。

残存状況が最も良好な第5郭北部の石壘にしても比高差は50cm程であり、充分な高さとは言えない。ただその上部に杭を立てたと考えられる痕跡が認められることや、第3郭北西部の石壘は中央部東西に破碎礫を含まない部分があることから、その上部に柵列が並ぶと考えられ、他の石壘もほとんどが柵列の基底部となるのではないだろうか。

柵列としては第2郭の東縁、第8郭の北東縁にも可能性が認められる。

第1郭に配置されている大きな礎石群は、第2郭東部の2巨岩と関連して城門となるのではないかとの意見がある。調査の結果、2巨岩は岩脈の露頭であり、その間に安山岩の上面が平坦な石が配置されていることが判明した。さらに大きな礎石の周囲では瓦、漆喰、寛永通宝などの近・現代の遺物が多数検出された。また第2郭・第5郭で検出された建物の礎石を比較すると第1郭の礎石はあまりに大きすぎ、城跡に伴う遺構とするのは疑問である。天霧城跡とはほぼ同時期の遺跡である福井県一乗谷朝倉氏遺跡において検出された建物の礎石などと比較しても大きすぎるものである。近世以降の神社などの建物の礎石である可能性が高い。

第2郭、第5郭で検出した礎石は残存状況がそれほど良好なものではないが、礎石を有する建物が東方尾根に存在した事実は大きな意義をもつ。また第2郭では明錢を中心とした古銭がまとまって出土し、第2郭から第3郭にかけての北斜面で出土した多量の土器群は東方尾根中の各郭の性格を暗示するものとして興味深い。

発掘調査を実施して得られた新知見は多いが、何としても城跡中の一つの尾根を調査したにすぎず、これだけの資料で城跡を考えるにはあまりに心もとない。今回の調査地以外の発掘調査が実施されてはじめて東方尾根の意義付けも可能となるであろう。

参考文献

- 小室栄一『中世城郭の研究』1965.
- 鳥羽正雄監修日本城資料館著『城郭』1969.
- 一市二町天霧城跡保存会『讃岐天霧城を探る』1980
- 福井県教育委員会朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅲ』1981.

IV 遺物について

1. 出土状況

調査区からは、土師質土器・輸入陶磁器・鉄製品・銅製品・錢貨・貝殻・瓦片等が出土した。総量は28ℓのコンテナに約20杯分に達した。

出土した遺物の大半を占めるのは土師質土器で、主にP4地区～P9地区より出土した。しかもその大部分は平坦面ではなく、斜面部からの出土品である。完形品もしくは完形品に近いものは少量で、ほとんどが破片となっていた。遺物を包含する土層は基本的には第2層及び第3層で、調査区のほぼ全域に及んでいた。包含される遺物の器種・時期については層位間の差は認められなかった。

P2・P3地区では近世後半以降のものと思われる大量の瓦片に混って、日本製の磁器・寛永通宝などが出土した。他の区画に較べて、近世以降に属する遺物の占める割合が大きい。これは、近世になって神社が建立された際、整地によって古い層がある程度削平されたためと思われる。

P4～P6地区とP7～P9地区は、今回の調査区中最も面積の広い平坦面で、種々の遺物が出土した。平坦面からはまとまって出土した古銭のほか、雁股鐵・釘・鍋などの鉄製品、飾り金具と思われる銅製品、皿・壺・椀などの土師質土器が出土した。また、この地区北側の斜面からは、皿・壺・鍋・鉢などの土師質土器・釘などが多数出土した。

P10～P16の間は、南側で崩壊が著しく、平坦面も狭くなっていたこともある。しかし、出土した土器類はP4～P9で出土したものと同種・同タイプのものである。

P17及びP18地区は再び平坦面が広くなっているが、これに対応するように遺物の出土量も若干増大した。この平坦面東側斜面の石垣直下より土師質土器の鍋が出土するなど、P4～P9で見られた状況に類似していた。

2. 土製品類

土器 土師質土器が大半で、輸入陶磁器・備前焼がごく僅か出土した。土師質土器は、皿・壺・椀・鍋・擂鉢・壺が出土した。皿及び壺については成形技法・口径で区分・タイプ分けをおこなった。底部の切り離し方法がヘラ切りのものをA、糸切りのものをBとした。また口径10cm以下、器高2.5cm以下を皿、以上を壺とし、それぞれをさ

器種	底部切り離し		糸切り
	口徑7cm以下	皿I A	
皿	口徑7cm～10cm	皿II A	皿I B
	口徑10cm～13cm	皿II B	皿II B
壺	口徑13cm以上	壺I A	壺I B
	山茶椀形	壺II A	壺II B
椀	高台付		椀II

表1 土師質土器、皿、壺

らに細区分した（表1）。糸切りのものとヘラ切りのものでは胎土に明瞭な差がみられた。前者は胎土精良なのに対し、後者は微砂粒を多く含んでいる。

輸入陶磁器には青磁・白磁・染付がみられる。器種は碗と皿である。備前焼には皿と甌が見られる。

以下調査区ごとに土器の概要を記述し、遺物から見た郭間の関連を明らかにしたい。

P 1—第1郭東斜面にあたり、遺物の出土量は極めて少なく、土師質土器皿 I B (図49-1)・皿・坏などが出土した。

P 2—第1郭平坦部東半にあたる。土師質土器皿・坏・碗・近世陶磁器などが出土した。

P 3—土師質土器皿・碗 I B (図49-2)・備前焼かと思われる小皿 II B (3)・近世瓦片・近世染付片などが出土。平坦部では近世以降の遺物が第1層を中心に多くみられた。特に近世瓦片は焼上とともに多数出土した。

P 4—土師質土器皿 II A (図49-4・6)・皿 II B (5・7・8)・坏 I A (9・10)・坏 I B (11・12・13・17)・坏 II B (14・15・16)・擂鉢・鍋 I (22)・白磁碗 (18・19・21)・青磁碗 (20) が出土した。鍋は完形品でないが、把手をつけるためのものと思われる穴がある。本来は一対のものと思われる。内傾した口唇部に上から内側に向って穿孔した後、穴の外側を指でつまみ出して整形している。皿 II B (17) は体部が直線的に立ち上っている点で他と異なり、区別されるのかもしれない。平坦部よりも斜面部からの出土が多く、遺存状態も良好であった。

P 5—土師質土器皿 II B (図50-1・2)・皿 II A (3)・坏 I B (4・5)・坏 II B (6・7・8・9・10)・碗 I B (11・12)・擂鉢 I (14・15)・鍋・白磁 (13) などが出土した。土師質土器皿・坏の中で、静止糸切りのものについては、1. 底部切り離しの際に糸を入れるか出す時、あるいはその両方において若干位置が下方にずれて土器底に段ができる。2. 糸を引く時、器壁外面に当った痕跡を残している。3. 外底中央は抉られたように窪んでいる。という特徴が認められる。現時点では他に類例が無く、天霧タイプと呼べるような特異性をもっている。擂鉢14・15は小型に属し I 類とした。クシ状工具で条痕をつくり出している。8条のものと6条の2種がみられる。破片のため全容を掴めない。図示した2例はともに粗雑な感を呈する仕上げである。

P 6—土師質土器皿 I B (図51-1)・皿 II B (2・3・15)・坏 I A (4)・坏 I B (5・6・7・8・9・10・11)・碗 I B (12・13・14)・碗 II (16)・鍋 II (17・18・20)・擂鉢 (19)・IV期の備前焼甌片などが出土した。図示しなかったが、皿 II A・皿 III B・鍋 I なども出土しており、最も多種多様の土器が出土している。15は土師質土器皿 II B と思われるが、体部を失しているため口径は不明である。この土器は底部中央が穿孔されており、3とともに灯明皿の芯押さえの可能性も考えられる。ただ、3は焼成後の穿孔であるのに対して15は焼成前の穿孔である。穿孔のある皿はP 1より1点出土しており、計3点を数える。17は土鍋の脚である。今回出土の鍋 I・鍋 II・鍋 III のどのタイプに接合するかは不明である。18も同じく土鍋の脚と思われる

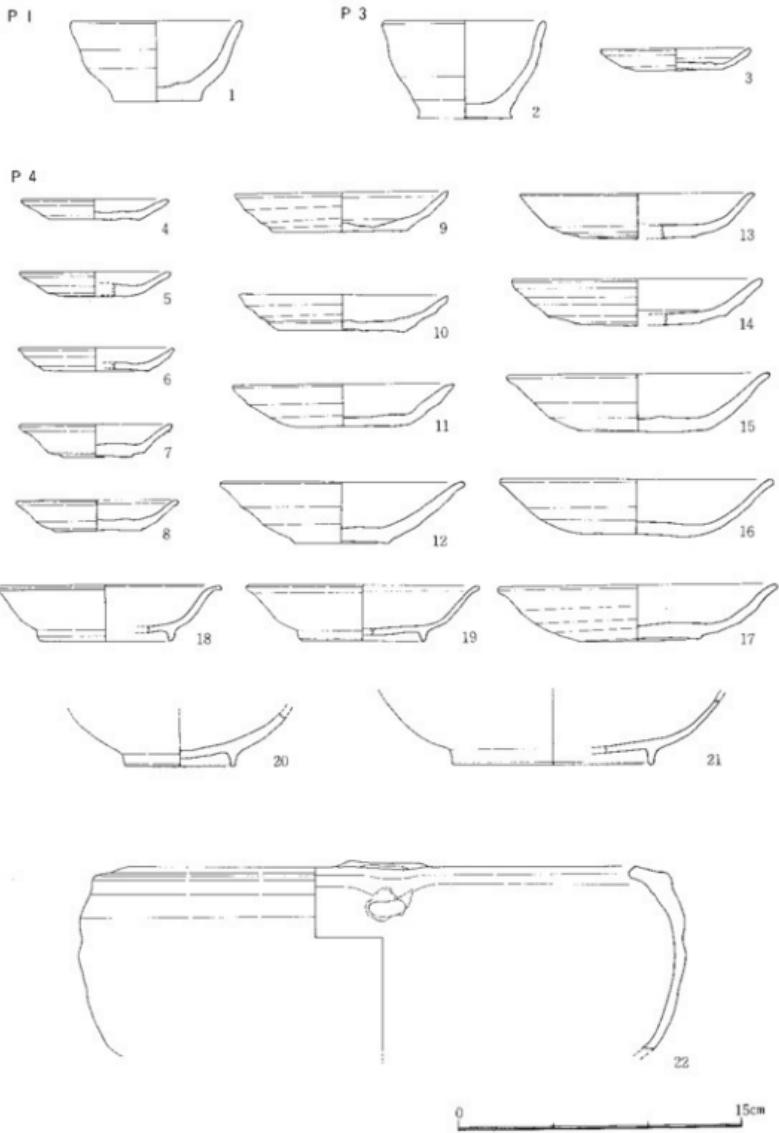


図49 P 1・P 3・P 4 地区出土土器

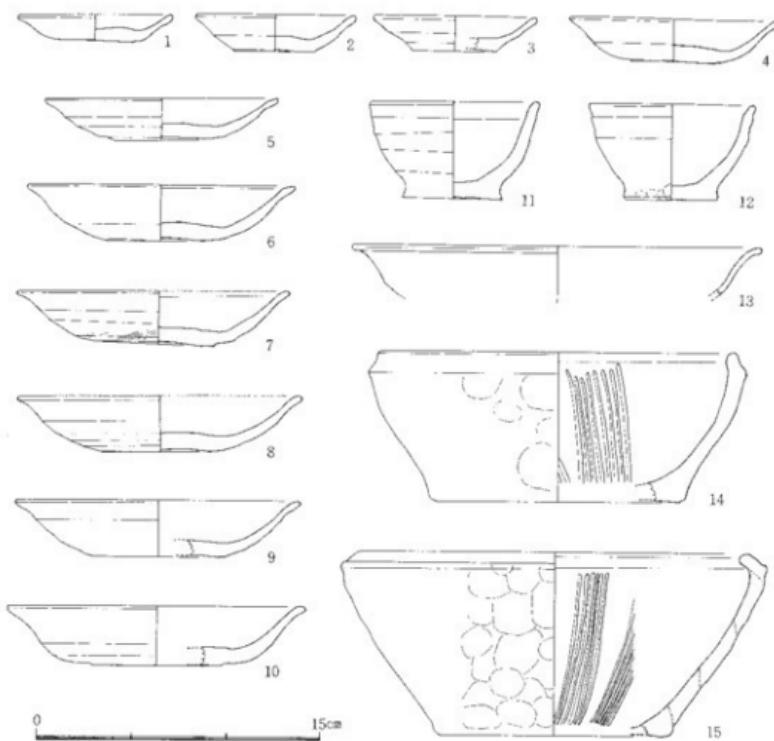


図50 P 5 地区出土土器

が、あるいは火鉢か壺の脚かもしれない。図示した土器は9を除いて斜面部の2・3層からの出土である。

P 7 - 土師質土器皿II B (図52-1)・壺I A (3・4・5)・壺I B (2)・椀I (6・7)・染付 (8)・磁器などが出土した。皿・壺・椀とともに回転による成形のち、ナデによる仕上げがおこなわれている。口縁端部でやや外反するもの、あるいはやや内傾するものの違いがあるが、成形技法に由来するものではなく、単なる個体差と思われる。椀は6・7ともに口縁部を欠失しているが、同様の口径・仕上げであったと思われる。8は染付けである。厚めの釉が体部内外面と見込み中央部に施されている。高台と高台内側は露胎となっている。染つけ部の色は淡灰青色である。

P 8 - 土師質土器皿II A (9)・皿II B (10)・壺I A (11・12・13)・壺I B (14)・擂鉢II (15)などが出土した。図示した擂鉢は大型でII類に属す。やや直立気味の口縁で注口をもっている。

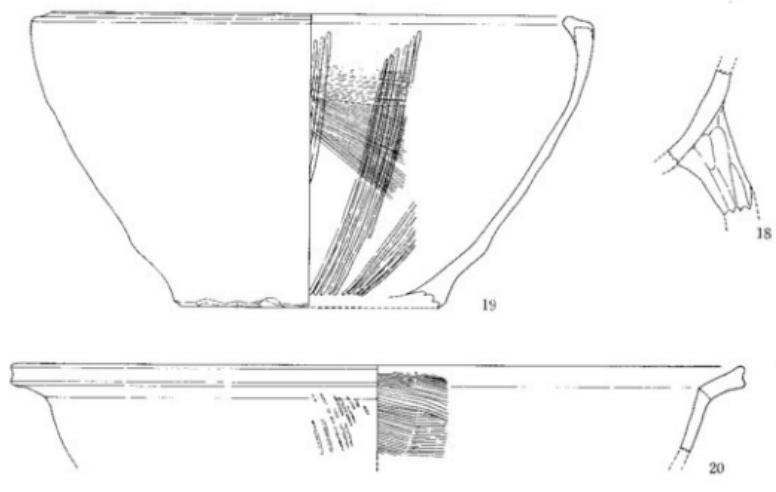
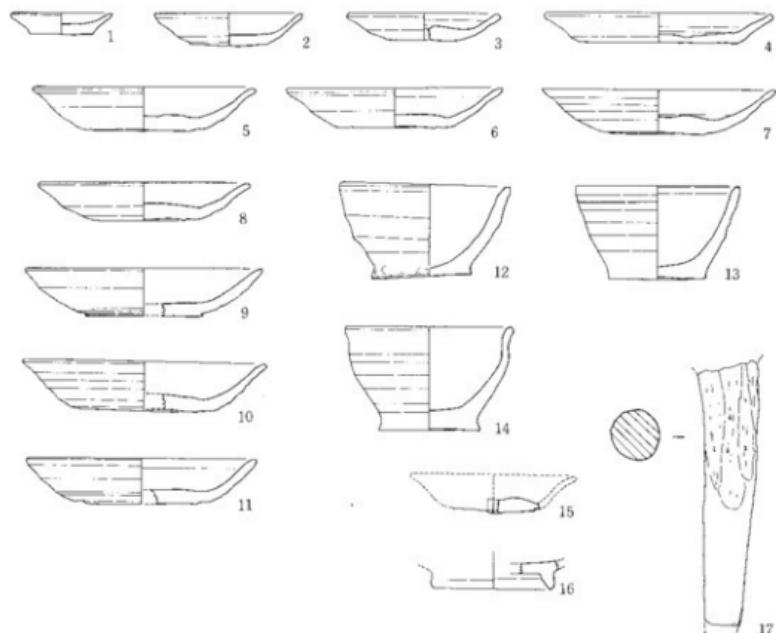
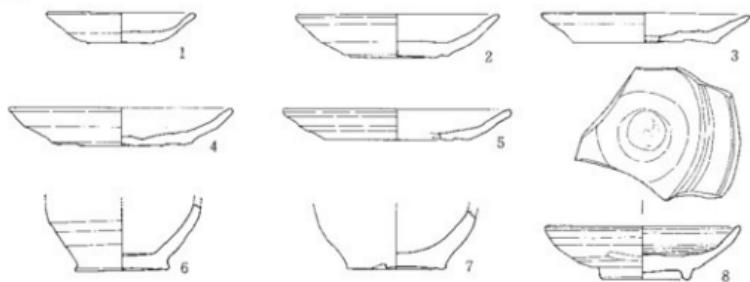


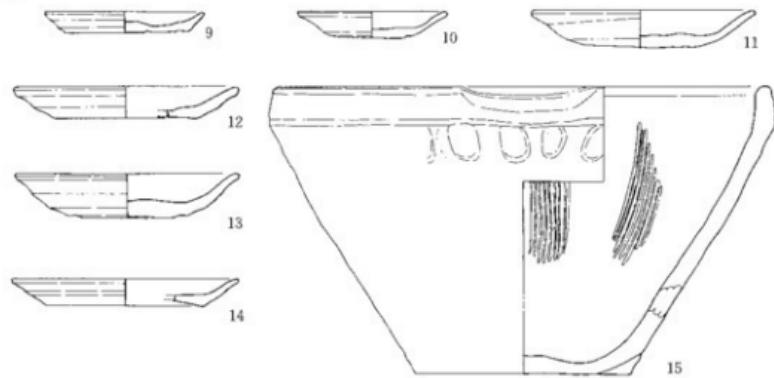
図51 P 6 地区出土土器

0 15cm

P 7



P 8



P 9

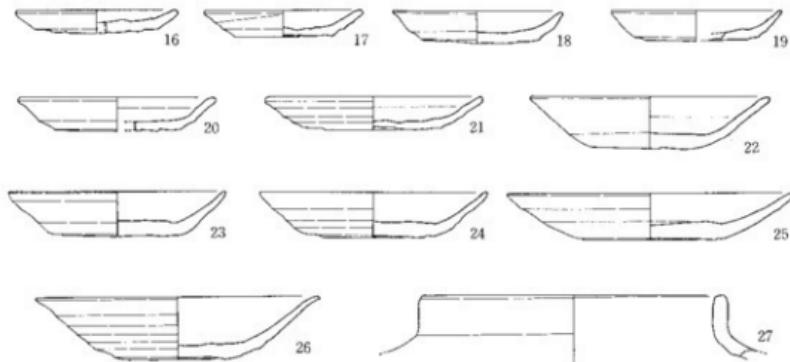


図52 P 7・P 8・P 9 地区出土土器

0 15cm

内面はナデによる整形ののち、右手に原体をもって条痕を施したことがわかる。条痕の数は8条を数える。体部外面の口縁直下には成形時の指圧痕がめぐっている。

P 9 - 土師質土器皿II A (16・17・18・19・20)・壺 I A (21)・壺 I B (22・23・24)・壺 II B (25・26)・壺 (27)・染付などが出土した。

P 10～P 16地区は第4郭から第7郭にあたり、遺物の出土量は極めて少量である。しかし、その内容は第2郭・第3郭と何ら変わることがない。土師質土器皿・壺・鉢・鍋などが出土している。鍋には、口縁がほんの少し外反気味で肥厚するもの(鍋I)、口縁が「く」の字状に外反するもの(鍋II)、口縁部よりやや下った外面に羽をもつものの(鍋III)、の3タイプが出土している。

P 17～P 18地区からは、土師質土器皿・壺・擂鉢・鍋I～III、備前焼甕片などが出土している。備前焼甕は口径36.6cmを測る。口縁についた玉縁はかなり退化しており、Ⅳ期に比定できるものと思われる。第8郭東斜面の石垣直下より、うつ伏せた状態で出土した鍋は、鍋IIに属し、口径47.5cmを測る大型のものである。

土製品、土鈴・土錘・平瓦・丸瓦などが出土した。土鈴は、薄手で灰黒色に焼成されている。土錘は、管状を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。長さ5cm・径2.6cmを測る。平瓦は主に第1郭より出土した。全て近世のものである。神社建立時のものと思われる。丸瓦のうち、第1郭出土のものは平瓦同様近世のものである。第3郭P 8地区の平坦面北縁から数点出土した丸瓦は凹面に布目痕をもつ厚手のもので、中世後半にさかのばると考えられる。天霧山頂部や調査区の設定された東方尾根裾部から数点の瓦片が表面採集されたが、各郭に積極的に結びつけるには問題が多い。

3. 金属製品類

鉄製品 錫(図54-1・2・3・4・5)・刀子(6・7・8)・切羽(9)・不明鉄器(10・11・12・15・16)・戸締り金具(13・14)・釘などが出土した。各々の出土地点については観察表に記した。釘は調査区の全域にわたって出土した。大きさは一様でないが、断面が四角形を呈し、頭部が薄く叩き延ばした点は共通する。図示した錫は全て雁股錫であるが、他に錫身が单一のものが1点出土している。切羽の遺存状態は良好である。刀子の完形品は出土しなかった。鉄鍋は全体の約1/5が出土した。平底で外底に径1cm、高さ1cm程度の突起がみられる。径から復元すると3点になると思われる。復元口径は27.2cmを測る。長さ5.5cmの注ぎ口と注ぎ口のつけ根に吊り手用の耳には径0.5cmの穴があけられている。

銅製品(17・18・19) 図示したものの外、最大径0.5cm、長さ14cmの片方に頭部が認められ、他方が細く尖っているものが出ていている。用途は不明である。いづれにも共通している点は金箔が付着している点である。恐らく調度品等の飾り金具であろう。

第1郭からは銅板片が出土したが、他の遺物の状況から見ても近世のものと思われる。

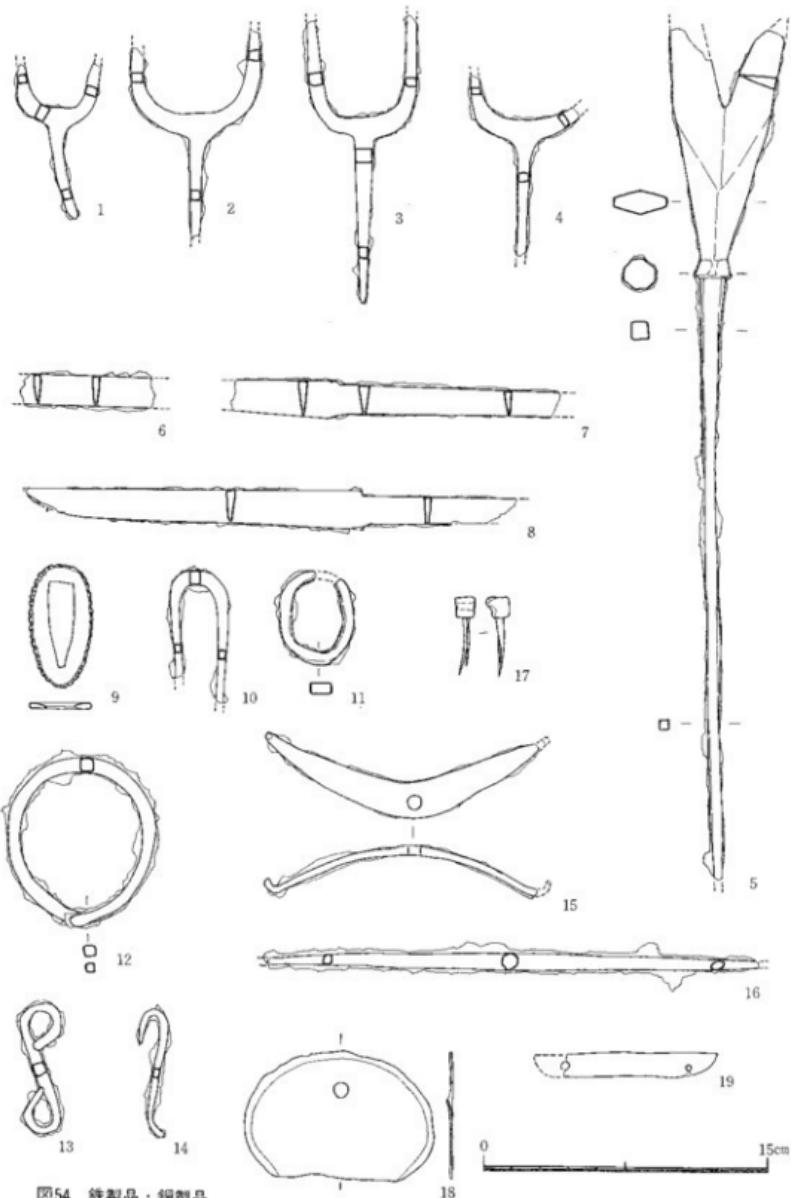


図54 鉄製品・銅製品

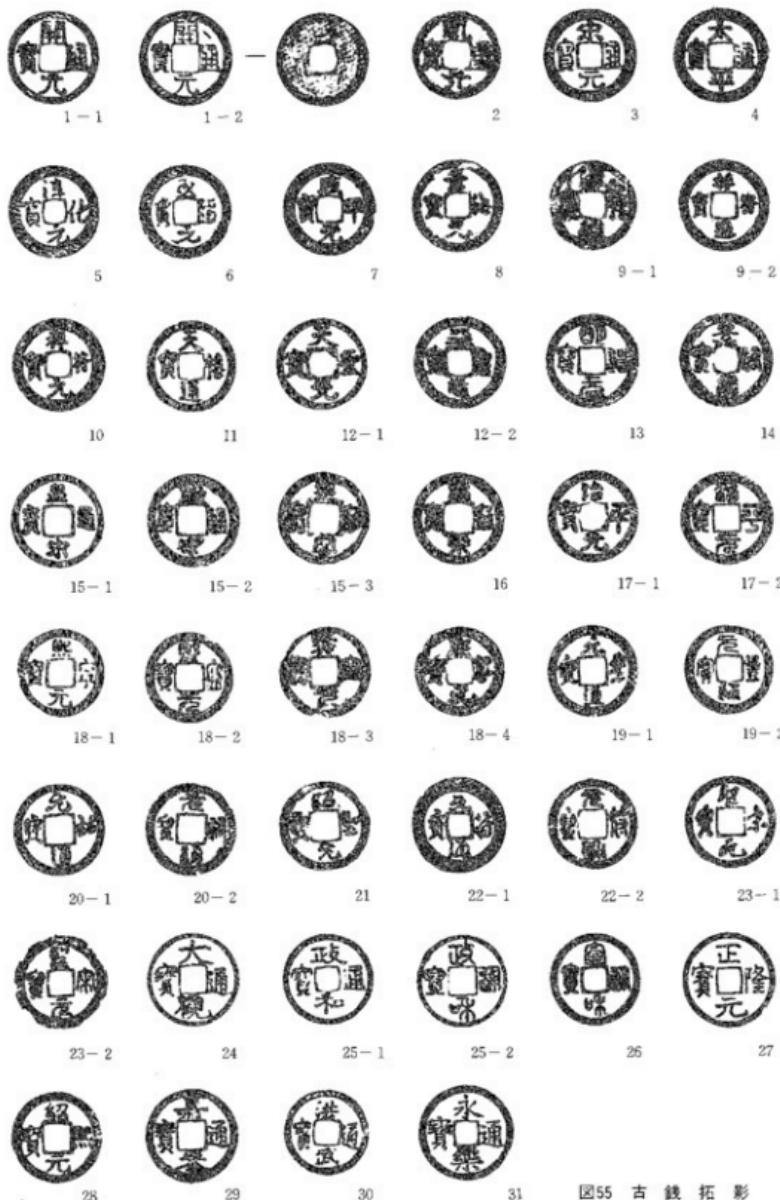


圖55 古 錢 拓 影

銅銭（図55、表2）

銅銭は、開元通宝から寛永通宝まで32種、142点が出土した。出土銅銭の銭種、出土区画については表2に示した。序列は初寿年による年代順とした。その他とした19点は破損や摩耗のために判別不能のもの、及び古銭かどうか断定できかねるものである。また、各銭種1点ずつ拓影を図55に掲げたが、同一銭種でも銭名字形の異なるものについてはさらにこれを掲げた。

P5地区平坦面では地山である岩盤直上から62枚がまとまって出土した。それはあたかも紐に通されたまま遺棄された状態で出土した。この他のものについては1枚～3枚程度でまとまりはなかった。しかし、その多くは第2郭のP5とP6地区の平坦面から出土しており、斜面部からの出土は稀であった。

4. その他

土製品類・金属製品類とともに貝殻が出土した。径10cm前後の巻貝である。石灰質の部分がかなり風化している。石製品・木製品等の遺物は出土していない。

5. まとめ

今回の調査では土製品類・金属製品類など多数の遺物の出土があった。中世末の山城の調査で出土した遺物としては、県下では類をみない量である。その資料的価値は計り知れないものをもつと思われる。ところが、調査期間等の都合でいまだ資料整理に十分な時間をさくに至っていない。そこで、遺物については、注目すべき点の概要を報告することとした。

先ず、土製品類については以下の視点が得られた。

1. 土器の大部分を占めるのは土師質土器で、の中では皿・壺が多く、次いで椀・鉢類となる。今回の報告では皿と壺を口径と器高の数値で分類した。しかし口径の相違には底径の差がみられず、むしろ同一の粘土柱から同一の技

法で成形していると考えられる点を重視すれば、同一の器種として扱うのが適当かもしれない。

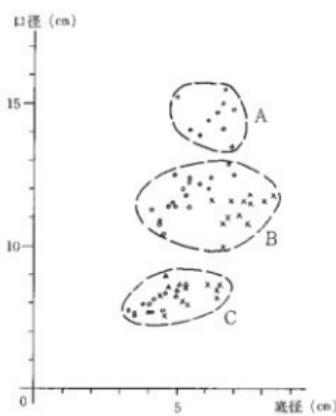


図53 土師質土器分布図

在するが、最上位のグループには「回転ヘラ切り」のものが認められない。口径値の区別が明瞭になされる反面、底径値の区別が不明瞭である。この中で、「回転ヘラ切り」と「静止糸切り」かはっきり区別されるという点は注目しなければならないであろう。同時期に技法の異なる2つの製作集団から供給を受けたのか、あるいは供給を受けた時期を異にするのかは、今回の資料だけでは判断できない。なお、図中の記号×は「回転ヘラ切り」、○は「静止糸切り」、△は楕を示している。

3. 磁器・陶器類の多くは中国よりの輸入ものと思われる。青磁の楕は概して器壁が厚く、白磁のそれは薄い。また染付にも薄手のものが多い。染付の文様は多種多様にわたるが、青磁・白磁同様ほぼ15~16世紀のものと思われる。土師質土器についてもこの時期に比定できるものと思われる。

金属製品は、釘・武具を中心とする鉄製品と飾り金具と思われる銅製品がある。釘は第1郭より第8郭まで多量に出土している。斜面部への転落のほかは郭を越えての移動は無いものと思われるので、各郭において釘が使用されたと考えられる。武器は第2郭で多く見られたが、他の遺物の出土量に比例するものであり、むしろ遺物総量として多い点に注目したい。

銅製品には一部に金箔の付着が認められることから飾り金具としたが、用途は不明である。しかし、貴重品の性格をもっている点に注目しなければならないであろう。

銅錢については出土地点が問題となろう。各郭から散乱して出土したものと、第2郭からまとまって出土したものとの対比。頂部より多量に出土したという伝承もあるので、類例を検討しなければならない。

各郭における建築物については、一部で礎石様の石とか窪みが検出されており、大量の釘が出土していることからもその存在の可能性は大であるように思われるが、その規模とか性格については不明な点が多い。また瓦の使用については、第3郭から出土した丸瓦が他の出土遺物の時期に一致するとはいえるが、出土点数が少なく問題点が多い。

以上、今回の調査で出土した遺物から見ると、時期的には15~16世紀という限定された期間を考えられるが、それはあくまでも東方尾根に限られることである点を忘れてはならない。

V おわりに

踏査・地形測量では知り得なかつた多くの事実が、今回の発掘調査により明らかになった。尾根の原地形を巧みに利用しつつ、石垣や削平などで平坦面の拡張を図っていること。石塁・掘り切りによる要所の造成。また、土師質土器・磁器を中心とする日用雑器や釘・武具などの鉄製品の出土は、当初の予想をはるかに上回るものであった。

天霧城東方尾根における郭の造成がほぼ単一の時期になされたこと。出土した遺物が語るところによれば、城が機能していた期間は15~16世紀の短期間であること。これらの事実は1つ1つが重要な意味をもつている。しかし、忘れてならないのは、今回の発掘調査は天霧城の一角を占める東方尾根に限られたということである。特に連郭式の天霧城において、城が城としての機能を發揮しうるためには全体の連系が不可欠である。本丸が想定されている最高所や北方尾根、あるいは北東方尾根との関連については今後に課題が残されている。もちろん居館との関連にも注目しなければならない。

昭和52年12月に、文化財保護審議会が天霧城を国指定の史跡に答申して以来、地元では地権者の同意を得るための作業がなされてきた。そうした中でおこなわれた今回の発掘調査が契機となって急速に事態が進展し、まもなく文化庁による官報告示がなされる運びとなった。正式決定となれば、讃岐における中世山城では初めての国指定の史跡となる。200か所を越える中世山城の典型として、また西讃の雄香川氏の城として、ますます重要な位置づけがなされるであろう。そのためにも、今後の保護・活用には十分な検討がなされなければならない。

なお、今回の調査に要した費用の収支は次のようになっている。

天霧城跡発掘調査決算報告書

収入内訳

業者負担金 8,152,000円

一市二町負担金 600,060円

県費負担金 600,000円

合 計 9,352,060円

支出内訳

賃 金 8,152,000円

旅 費 292,160円

報 償 費 11,400円

消 耗 費 244,480円

備 品 費 52,020円

印 刷 製 本 600,000円

合 計 9,352,060円

表2 古銭一覧表

錢種	初鑄年(西暦)	調査区分																		計	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
1 開元通寶	唐 武德4年(621)					6	3	1												3	13
2 乾元重寶	唐 乾元2年(759)							1													1
3 宋元通寶	北宋 建隆元年(960)						1														1
4 太平通寶	宋 太平興國元年(976)					1	1														2
5 淳化元寶	宋 淳化元年(990)						1														1
6 至道元寶	宋 至道元年(995)					1															1
7 戒平元寶	宋 戒平元年(998)	1																			1
8 熙德元寶	宋 熙德元年(1004)					1															1
9 祥符通寶	宋 大中祥符元年(1008)					1	2														3
10 祥符元寶	宋 (〃)					1	2													1	4
11 天禧通寶	宋 天禧年間(1017~1022)					1	1														2
12 天聖元寶	宋 天聖元年(1023)							1		1											2
13 明道元寶	宋 明道元年(1032)								1												1
14 景祐元寶	宋 景祐元年(1034)						1														1
15 皇宋通寶	宋 宝元2年(1039)					3	5	1		1											10
16 治平通寶	宋 治平元年(1064)						1														1
17 治平元寶	宋 (〃)					1	1														2
18 熙寧元寶	宋 熙寧元年(1068)					4	4	1													9
19 元豐通寶	宋 元豐元年(1078)		2			7	5	1	2					1							18
20 元祐通寶	宋 元祐元年(1086)					1	6	1	1											1	10
21 紹聖元寶	宋 紹聖元年(1094)					1	1	2													4
22 元符通寶	宋 元符元年(1098)					1	1														2
23 聖宋元寶	宋 建中靖國元年(1101)					1		1												1	3
24 大觀通寶	宋 大觀元年(1107)					1	1														2
25 政和通寶	宋 政和元年(1111)					2	2		1												5
26 宣和通寶	宋 宣和元年(1119)							1													1
27 正隆元寶	金 正隆元年(1156)							1													1
28 紹熙元寶	南宋 紹熙元年(1190)						1														1
29 嘉泰通寶	宋 嘉泰元年(1201)							1													1
30 洪武通寶	明 洪武元年(1368)							2													2
31 永樂通寶	明 永樂6年(1408)	1				1			1										1	1	5
32 寛永通寶	日本 寛永年間(1624~1644)	3	6	1							1		1								12
33 その他						3	3	4	1	2			1					1	4		19
計		2	3	8	7	38	50	4	6	6	0	4	1	0	0	0	1	6	6	142	

第1部 P1

器種	辨認番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土土 師 質器	横 器	口径 9.0 底径 4.6 器高 4.2	指による回転ナデが体部内外面に丁寧に施されている。 右回転。	粘土精良、黄茶色

第1部 P3

器種	辨認番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土土 師 質器	横 器	口径 8.3 底径 5.0 器高 5.2	静止系切。施成普通。体部回転ナデ。回転時の細い糸 痕多数。	粘土精良、淡黄茶色
陶器	並 I B	口径 7.8 底径 4.5 器高 1.1	回転ナデによる成形。ナデの跡が内面に残る。その後回 転系切り離し、後体部外面をヘラ削り。右回転。	粘土に極微砂粒含、暗赤褐色。 備前焼？

第2部 P4

器種	辨認番号	法量(m)	形態・成形手法の特徴	備考
土 師 質 土 器	並 I A	口径 7.6 底径 4.6 器高 1.1	施成普通。回転ナデ仕上げ。底部へラ切り後。板目痕。	粘土精良がが繊に 0.3mm 前後の微 砂粒含、淡褐色（部分的に赤味 を帯びる）
	並 I B	口径 7.8 底径 3.3 器高 1.3	施成普通。回転ナデ仕上げ。底部静止系切。	粘土精良、淡赤褐色、反転復元
	並 I A	口径 8.0 底径 5.4 器高 1.2	施成良好。内底不定方向ナデ。体部内外面は回転ナデに よる仕上げ。底部回転へラ切。板目痕。体部上半で外反 豊高 1.2 せず内傾気味。	粘土に 0.5mm 前後の微砂粒多く 含、淡赤褐色、反転復元
	並 I B	口径 8.0 底径 3.8 器高 1.7	施成普通。回転ナデ仕上げ。底部静止系切り。底部の器 肉が厚い。体部上半で外反。	粘土精良、淡褐色
	並 I B	口径 8.4 底径 4.6 器高 1.6	施成普通。回転ナデ仕上げ。内底は不定方向。粘土精良 施成褐色ナデ。口縁端部で外反。	粘土精良、淡褐色
	环 II A	口径 11.0 底径 6.9 器高 2.1	施成良好。底盤と体部を接合した痕跡がみられる。回転 ナデ仕上げ。内底は不定方向のナデ。ヘラ切左回転。内 底部から口縁部へとゆるやかに立ち上がる。	粘土に 0.5mm 前後の微砂粒多く 含む、淡黄色へ淡赤黄色
	环 II A	口径 10.8 底径 6.6 器高 1.9	施成良好。底盤と体部を接合した痕跡が見られる。回転 ナデ仕上げ。内底は不定方向ナデ。内底部から口縁部へ とゆるやかに立ち上がる。底部回転（左？）へラ切後板 目痕。9 と同一技法。	粘土に 0.5mm 前後の砂粒含む全 霧母・黒雲母を含む。淡黄色、 外底は淡赤褐色
	环 II B	口径 11.4 底径 5.4 器高 2.2	施成はやや軟質。回転ナデ仕上げ。底部静止系切り。	粘土精良、赤茶色。表面は朱 を塗った如く赤味を帯びている 口縁端部内面に 1 × 2.5 cm 程の スズ付有
	环 II B	口径 12.0 底径 6.1 器高 2.3	施成はやや軟質。内底部と口縁端部は明瞭な棱をもたず ほぼまっすぐ斜めに立ち上がっている。回転ナデ仕上げ。	粘土精良、稀に 0.4mm 程の砂粒 含、淡褐色
	环 II B	口径 12.9 底径 6.6 器高 2.5	施成普通。回転ナデ仕上げ。体部外面にはナデの条痕が 明瞭に残る。底部静止系切り。	粘土精良、体部内面の一部が淡 赤色の外は淡黄土色反転復元
	环 III B	口径 13.5 底径 6.9 器高 3.0	施成はやや軟質である。回転ナデ仕上げ。内面は摩耗著 しく調整痕不明。底部静止系切り。	粘土精良、赤茶色、反転復元
	环 III B	口径 14.1 底径 5.4 器高 2.9	施成普通。回転ナデ仕上げ。内面に摩耗著しく調整痕は 不明瞭。底部静止系切り。	粘土精良、淡黄土色
	环 III B	口径 14.4 底径 6.1 器高 3.0	施成良好堅硬。回転ナデ仕上げ。口縁端部付近で外反。 底部静止系切り。	粘土精良、明赤黃土色。底部外 面が特に赤色が濃い
	环 II B	口径 12.5 底径 4.9 器高 3.2	施成良好堅硬。回転ナデ仕上げ。底部から口縁部に向 て新方向に真っ直ぐ立ち上っている。皿口類の中では特 異な存在。底部静止系切り。外底因縫部に板目痕。	粘土精良、黄土色内外面にスス 状汚れ

器 械		辨図番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備 考
磁 器	柄	図49 -18	口 径12.2 高台径 6.4 器高 0.5	口縁付近に急に外反。端部で肥厚。高台付部分を除いて施錠。高台接合部に沿って釉の亀裂。	白磁、反転復元
	柄	-19	口 径12.2 高台径 6.4 器高 0.5 器高 2.0	体部下半から斜上方に立ちあがった後口縁付近でやや外反する。端部もやや肥厚気味。高台受付部分を除いて施錠。体部は縱方向内底見込み部分は不定方向の貫入。	白磁、反転復元
	柄	-20	高台径 5.6 高台高 0.7	底部から体部にかけて、枝をもたずにゆるい円弧を描いて立ち上がる。高台と付部分以外に施錠。高台内側は白色釉、その他は淡緑色釉内面に深4mm高約1mmの突起あり。	青磁
	柄	-21	高台径10.4 高台高 0.8	高台置付以外に施錠。底部から体部にかけてゆるやかに立ちあがる。	白磁、反転復元
土 士 質 貨 等	鍋 I	-22	口径26.6	器外側には指印痕が附り残る。口縁部外側は加転ナデ。内面は回転ナデ及び斜め方向のナデ。つり下げ紐の穴は内側に上から下に押して設けている。一时と思われるか片方のみ残存。	胎土に0.5mm前後の砂粒を含む淡褐色、外面には二次加熱のためかスス付着

第2郭 P 5

器 様		辨図番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備 考
土 士 質 貨 等	皿 II B	図50 - 1	口径 8.0 底径 4.0 器高 1.4	焼成は堅緻である。回転ナデによる仕上げ。内面は不明瞭。底部静止系切り。底部が肥厚。	胎土精良、白黄土色
	皿 II B	- 2	口径 8.2 底径 4.0 器高 1.9	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。内底中心部と体部外表面下半は摩耗著しく調整痕不明瞭。底部静止系切り。底部から口縁部にかけて著しい変化は見られない。	胎土に2mm以下の砂粒を僅かに含む、淡褐色
	皿 II A	- 3	口径 8.3 底径 4.4 器高 1.9	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。内部と口縁部の境に棱がくがくするやかに立ちあがる。底部へラ切りを削除。	胎土に0.3mm前後の粗砂を含む外表面褐色内面黒褐色底部は赤味を帯びる反転復元
	杯 II B	- 4	口径10.8 底径 4.2 器高 2.2	焼成はやや軟質。左回転のナデ調整仕上げ。体部外周下半に斜め方向の乱れた細い条痕、赤切りの隙についた跡と思われる。底部静止系切り。	胎土は極めて良質、やや赤味を帯びた淡褐色
	杯 II B	- 5	口径12.4 底径 5.4 器高 2.2	焼成はやや不良。回転ナデ仕上げ。体部表面下半と内底はナデ調整。内底と体部の境に凹凸がみられる。口縁付近で僅かに外反している。底部静止系切り。	胎土に1mm前後の粗砂を含む淡褐色、部分的に赤味帯びる口縁端部にスス付着、反転復元
	杯 III B	- 6	口径13.9 底径 5.8 器高 2.9	焼成は良好。回転ナデによる仕上げ。体部外側もナデによる棱が不明瞭である。口縁端部で外反するが底部内側を押さえているためである。底部静止系切り。	胎土精良、明黄色
	杯 III B	- 7	口径14.1 底径 6.6 器高 2.8	焼成はやや軟質。回転ナデ仕上げ。内底は磨耗し調整不明瞭。体部外表面下半に斜め方向に乱れた細い条痕。口縁部内側を押さえた回転ナデのため端部で外反、静止系切り。	胎土極めて良質、淡褐色
	杯 III B	- 8	口径14.7 底径 6.4 器高 2.9	焼成はやや軟質。回転ナデによる仕上げ。体部外側にはこの柔軟性が山残る。内面は磨耗著しく調整痕不明。口縁端部でやや外反気味。底部静止系切り。	胎土精良、淡褐色
	杯 III B	- 9	口径14.8 底径 7.0 器高 2.9	焼成は良好。底部と口縁部は棱をもって面され、端部は少し肥厚して外反する。体部器型は比較的の無い。底部静止系切り後一部ナテ調整。	胎土精良、淡褐色、反転復元
	杯 III B	- 10	口径15.7 底径 6.7 器高 3.0	焼成は良好。回転ナデ仕上げ。体部半ばまで内傾気味に立ちあがった後ゆるやかに外反しながら口縁端部に至る。底部静止系切り。	胎土精良、底部及内面は赤黄色その他の赤褐色、反転復元
磁 器	椀 I B	- 11	口径 8.7 底径 5.3 器高 2.0	焼成普通。回転ナデによる仕上げ。体部外面にナテによる接が明顯に残る。口縁端部が半壇になっている。体部下端でややくぼみ底部で広くなっている。	胎土は精良、僅かに微砂粒を含む。白黄茶色
	椀 I B	- 12	口径 8.6 底径 4.7 器高 5.0	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。体部外面上半にナデによる棱が明確体部外面下端に指捺压痕。口縁端部は平坦。底部静止系切り。	胎土は精良だが特に微砂粒を含む淡黃色、反転復元
	大 盆	- 13	口径21.6	全面に施錠がなされている。体部下半は内傾気味に立ちあがるが上半では外反しながら肥厚した口縁端部に至る。	白磁、反転復元
土 質 貨 土 器	擂鉢 I	- 14	口径18.6 底径12.7 器高 7.8	焼成はやや軟質。外面は磨耗著しいか指捺压痕が残る。口縁端部は回転ナデ調整内面は回転ナデのみ8条のクシ目。	胎土には微砂粒を多く含む。淡赤茶色
	擂鉢 I	- 15	口径20.5 底径11.9 器高 9.5	焼成良好やや堅緻。粘土積み上げ成型。外面には指配压痕が明瞭に残る。内面は刷毛目調整ののちクシ目焼き(6条)。クシ目断面はH字状。口縁部は回転ナデ調整。	胎土には微砂粒を多く含む、まれに5mm程の粗砂を含む黄茶色反転復元

第2部 P 6

器種	標図番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土質	皿 I B	図51 - 1	口径 5.2 底径 3.3 器高 1.1	焼成は普通。底部からつまみ出して、成形した感をもつ。回転ナデ仕上げ。内底は不定方向ナデ。底部糸切り。
	皿 II B	- 2	口径 7.7 底径 4.0 器高 1.7	焼成良好。内底不定方向ナデ。体部回転ナデ仕上げ。内底と体部との間に棱線。全体として丸味のある形態を呈す。底部静止糸切り。
	皿 II B	- 3	口径 7.7 底径 4.1 器高 1.4	焼成は普通。回転ナデ仕上げ。底部中央に焼成後の穿孔が1個ある。内側から外に向けてのもの。底部静止糸切り。
	环 II A	-	口径 11.6 底径 8.1 器高 1.6	焼成は良好。回転ナデによる仕上げの後内底中央をヨコナデ。体部上半で盛りか外反。底部の器肉は薄く、全体として平たん浅い器形。底部回転ヘラ切り、後一部ナデ。
	环 II B	- 5	口径 11.4 底径 4.9 器高 2.3	焼成はやや軟質。内底不定方向ナデ。体部回転ナデ仕上げ。底部と体部との接合部。体部上半が外反する。底部静止糸切り。
	环 II B	- 6	口径 11.3 底径 4.1 器高 2.1	焼成は普通。内面磨耗のため調整不明。体部外面は回転ナデ仕上げ。口縁部は肥厚に外反。スス付着。底部静止糸切り。
	环 II B	- 7	口径 12.0 底径 5.2 器高 2.4	焼成は真好。回転ナデ仕上げ。底部の器肉が厚い。体部とは縦線で区画される。口縁部肥厚し外反。底部静止糸切り。
	环 II B	- 8	口径 10.9 底径 4.4 器高 2.0	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。体部下半は内傾気味に立ち上がるが上半で外半で外反する。底部静止糸切り。
	环 II B	- 9	口径 12.4 底径 6.2 器高 2.5	焼成はやや軟質。内面磨耗のため調整不良。外面上半ヨコナデ。下半回転ナデ。底部から口縁にかけてゆるやかに内傾しながら立ち上がる。底部静止糸切り。
	环 II B	- 10	口径 12.5 底径 7.0 器高 2.6	焼成は普通。回転ナデ仕上げ。外縁は成形時の水ひき線明瞭に残る。口縁で外反。底部静止糸切り。
器質	环 II B	- 11	口径 12.2 底径 5.8 器高 2.4	焼成良好。内底不定方向ナデ。体部は回転ナデ仕上げ。内底部と体部は回転による窪みで彫刻される。口縁端部が外反せずに終わっている。底部静止糸切り。
	碗 I B	- 12	口径 8.7 底径 5.1 器高 4.8	焼成良好。堅紙。回転ナデ仕上げ。口縁部平追。器高に歪。底部静止糸切り。
	碗 I B	- 13	口径 8.5 底径 5.0 器高 4.9	焼成普通。体部外面は成形時のナデによる模様が明瞭。内面はヨコナデ後一部に不定方向ナデ。口縁部に内傾した平坦面がわざに認められる。底部静止糸切り。
	碗 I B	- 14	口径 8.6 底径 5.3 器高 5.5	焼成はやや軟質。体部外面成形時のナデ。口縁部ヨコナデ。口縁部で外反。底部静止糸切り。
		- 15		焼成普通。内面は二次加熱による剥離痕。外縁にタール状スス付着。中央部に焼成前の穿孔。底部静止糸切り。
輪 II	- 16	高台径 6.1 高台高 0.8	焼成は普通。器壁の磨耗著しく調整不明。	胎土精良、淡褐色
土鍋脚	- 17		焼成普通。上半は上から下へのヘラ削り。下半はナデ。	胎土に砂粒含む淡褐色
土鍋脚	- 18		焼成やや良。ナデによる調整だが剥離著しく不明瞭。	胎土に 1 ~ 2 mm の砂粒。淡褐色
擂鉢	- 19	口径 27.4 底径 13.3 器高 15.3	焼成良好。外縁には成形時の指印圧痕。内面は横ないし斜方向のナデ(条痕が残る)の後クシ目。口縁部は内傾し肥厚。粘土紐を重ねた痕跡。	胎土に 1 mm 大の砂粒含む淡褐色 反転復元
鍋 II	- 20	口径 38.2	焼成良好。内面には 1 cm 当り 8 条の網目。外縁叩きの後ナデによる仕上げ。口縁部はヨコナデ。普通寺西遺跡出土の例と類似。	胎土に 1 mm 大の砂粒多く含む黒褐色、反転復元

第3郭P7

器種	辨区番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	環II B -1	口径7.6 底径3.5 器高1.6	施成は普通。体部に較べて底部の器肉が厚い。回転ナデ調整。体部半ばで薄くなり口縁部で肥厚。底部静止系切り。	粘土精良、赤味を帯びた淡褐色 反転復元
	環II B -2	口径10.4 底径4.5 器高2.3	施成は普通。回転ナデ仕上げ。内傾気味に立ち上った後口縁端付近でやや外反。底部内面の回転ナデによる。底部静止系切り。	粘土精良、淡黄茶色
	環II A -3	口径10.8 底径7.5 器高1.6	施成は良好。回転ナデによる仕上げ。口径に比して浅い。体部下半は外反気味だが上半ではやや内傾。底部回転ヘラ切、右回転。	粘土には0.5mm前後の砂粒を多く含む淡褐色、反転復元
	環II A -4	口径11.6 底径7.4 器高2.0	施成は良好。回転ナデによる仕上げ。体部下半でやや外反しつ立上がりが上半では内傾気味となる。底部削輪ヘラ切、左回転。	粘土には0.5~1mm程の砂粒を多く含む淡黄色部分的に赤味を帯びている。反転復元
	環II A -5	口径11.8 底径7.6 器高1.6	施成は普通。回転ナデ仕上げ。体部下半は内傾気味に立ち上った後上半ではやや外反する。回転ヘラ切り。右回転。	粘土には0.5mm前後の砂粒を多く含む、部分的に赤味を帯びた淡褐色、反転復元
	椀 -6	底径4.9	施成はやや軟質。回転ナデによる仕上げ。磨耗著しいがナデによる柔軟が外面に残る。底部静止系切り。体部下端でも最も供り不足でややくる。底部静止系切り。	粘土施して精良、明赤茶色、口縁部欠損
	椀 -7	底径5.2	施成はやや軟質。回転ナデによる仕上げ。磨耗著しいがナデによる柔軟が外面に残る。底部静止系切り。系切り時の柔軟が折れてしまう付近。	粘土は精良、淡黄土色
陶器	染付碗 -8	口径10.1 底径6.4 器高2.8	摩めの物が体部内外面と見込み中央部に施されている。露胎部分は内面、薄茶色。外面明茶褐色。染つけの色は青灰白色。ろくろ回転石。	染付、粘土精良、粘土は淡灰黃土色

第3郭 P8

器種	辨区番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	環II A -9	口径8.5 底径6.4 器高1.1	施成良好。回転ナデ仕上げ。内底は不定方向のナデ。体部の立ち上がりが僅かしかなく、口径に比して浅い。底部回転ヘラ切り。その後板目がつく。右回転。	粘土には0.5mm程の砂粒を多く含む、淡黄色、口縁部は黒赤褐色2/3
	環II B -10	口径6.9 底径3.5 器高1.4	施成はやや良好。回転ナデによる仕上げ。底部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる。端部でやや肥厚。底部静止系切り。	粘土は精良、赤味を帯びた淡褐色
	環II A -11	口径11.6 底径6.2 器高2.0	施成は普通。回転ナデによる仕上げ。体部下半は内傾気味に立ち上がり半ばからゆるやかに外反する。底部回転ヘラ切り後板目板がつく。	粘土には0.5mm程の砂粒を多く含む淡茶色
	環II A -12	口径11.5 底径7.6 器高1.7	施成は普通。回転ナデによる仕上げ。内底に指圧痕が見られる。体部下半は内傾気味に立ち上がり半ばからゆるやかに外反。器肉は厚めである。底部回転ヘラ切り。体部外側にヘラ切り時の跡があり	粘土には0.5mm程度の砂粒を多く含む、淡赤茶色~淡黄茶色、反転復元
	環II B -13	口径11.5 底径7.6 器高2.3	施成は普通。回転ナデによる仕上げ。底部の器肉肥厚。磨耗著しく調整痕が不明瞭。底部静止系切り。口縁端部でやや外反。	粘土精良、淡黄土色
	環II A -14	口径11.8 底径8.4 器高1.4	施成良好。器壁の廻転のため調整痕不明瞭。回転ナデによる仕上げ。口縁部でわずかに外反。底部回転ヘラ切、右回転。	粘土には0.5mm位の砂粒を多く含む、赤味を帯びた淡褐色、反転復元
	楕 鉢 -15	口径25.4 底径11.3 器高15.0	施成は良好。底部から口縁にかけ斜方向にすわに立ちあがった後口縁端部でやや円錐。外面白縁直下に指圧痕がみぐる。内面はも手によるナデの後、クシ目(8条)を10~11カ所入れている。指でひねり出した片をもつ。	粘土に1mm大の砂粒を多く含む暗赤褐色

第3部 P 9

器種	辨証番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	皿II A -16	口径 8.2 底径 6.4 器高 1.2	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。内底は不定方向のナデ。器肉は厚く立ちあがりもなく浅い。底部回転ヘラ切り。	粘土に微砂粒を含む明黄茶色、反転復元
	皿II A -17	口径 8.1 底径 5.2 器高 1.4	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。内底及び体部外間に回転ナデの跡跡が明瞭に残る。体部は直線的。底部回転ヘラ切り。	粘土に微砂粒を含む淡黄土色
	皿II A -18	口径 8.7 底径 6.1 器高 1.7	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。後内面の一部に不定方向のナデ。体部は全体として内傾気味に立ち上がり器縁部でやや外反。底部回転ヘラ切り。	粘土に微砂粒を含む淡黄土色
	皿II A -19	口径 8.7 底径 5.5 器高 1.6	焼成は普通。回転ナデ仕上げ。内底は不定方向のナデ。体部は真っすぐ斜めに立ち上がる。底部回転ヘラ切りの後板目痕。	粘土に砂粒。多く含む赤味を帯びた淡褐色
	皿II A -20	口径 1.0 底径 0.6 器高 1.8	焼成は普通。回転ナデによる仕上げ。体部はやや外反気味に立ち上がる。底部回転ヘラ切り。	粘土に砂粒を多く含む淡黄色、部分的に茶褐色、反転復元
	环II A -21	口径 11.1 底径 7.2 器高 1.7	焼成はやや良好。体部回転ナデ。内底は不定方向のナデによる仕上げ。体部下半はやや内傾気味に、上半はやや外反気味に立ち上っている。底部回転ヘラ切り。	粘土に砂粒を多く含む淡褐色、反転復元
	环II B -22	口径 12.3 底径 5.4 器高 2.8	焼成は普通。内底は不定方向ナデ。体部は回転ナデによる仕上げ。内底と体部との間は回転による盛みで区画されている。体部は直線的に立ち上がる。底部静止系切り。	粘土質良、淡黄茶色
	环II B -23	口径 11.4 底径 4.7 器高 2.4	焼成は普通。内底の一部不定方向のナデ。体部は回転ナデによる仕上げ。底部の器肉は厚く、体部は口縁部に向って角くなりながらほぼ直線的に延びている。底部と体部は脚部による盛みで区画される。底部静止系切り。後板目痕。	粘土質良、赤黄茶色
	环II B -24	口径 11.8 底径 5.3 器高 2.4	焼成はやや軟質。内底は不定方向ナデ。体部回転ナデ仕上げ。体部は回転による盛みで底部と区画される。底部静止系切り。	粘土は精良だが柄に 0.5mm 大の微砂粒を含む淡褐色部分的に赤味を帯びる
	环III B -25	口径 15.2 底径 5.0 器高 2.4	焼成はやや軟質。内底は回転ナデ。内底溝の回転による盛みで体部と区画される。体部はほぼ直線的に立ちあがる。底部静止系切り。	粘土質良、淡褐色。部分的に赤味を帯びる
	环III B -26	口径 15.0 底径 6.6 器高 3.2	焼成はやや軟質。回転ナデによる仕上げ。内底はゆるやかなカーブで口縁部に立ちあがる。端部で丁寧なヨコナタが施され外反する。底部静止系切り。	粘土質良、淡褐色。口縁端部が赤味を帯びる
瓶	-27	口径 15.7	焼成は普通。底部内外面ヨコナタ。口縁端部はヘラ状工具によるナデが施され面取りがなされている。底部内面には不定方向のナデによる盛り上がりが見られる。	粘土に微砂粒を含む淡黄土色、反転復元

鉄製品

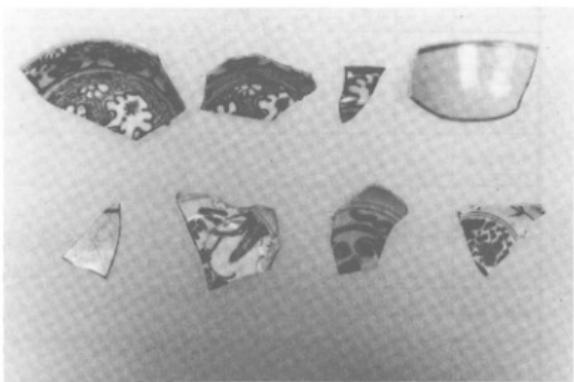
器種	排図番号	出土地区	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
雁首鐵	-1	5郭 P11N		刃部・柄ともに断面は四角形である。やや小形に属す。二つの刃部はやや外方に開く。	刃先を欠失 P11N 3層
"	-2	3郭 P9N		刃部・柄ともに断面は四角形。二つの刃部はほぼ平行	刃先を欠失 P9N 斜面2層
"	-3	5郭 P11N		刃部・柄ともに断面は四角形。二つの刃部はほぼ平行	刃先を欠失 戴も残りがよい P11N 3層
"	-4	2郭 P3S		刃部・柄ともに断面は四角形。	刃先を欠失 P3S 2層
"	-5	2郭 P4N		先端内側がV字状に落み鋸利を刃部となっている。柄の断面は四角形。刃部に近い程太くなる。刃部と柄の接合部は斜面六角形を呈す。	刃先を欠失 P4N 2層
刀子	-6	8郭 P18N	刃部幅1.3~1.05 厚 0.3	刃部のみ残る。柄に近いと思われる方がやや厚くなっている。	P18N 2層
"	-7	8郭 P17S	刃部長 11.7 刃部幅 1.3 刃部厚 0.3	刃部の柄の焼目上方はハッキリした段。下方はゆるやかな曲線で処理されている。柄の断面は台形で刃をもたない。	刃先と柄側端を折損 P17S 斜面2層
"	-8	3郭 P7S		刃部の断面はほぼ三角形に近い。柄の断面は長方形に近い。刃部と柄は明瞭な段によって区別される。	柄側端を折損 P7S 斜面2層
切羽	-9	2郭 P5N		周縁部に刺みがある38個。裏は平坦、表は中央に向って傾斜。	P5N 2層
不明鉄器	-10	2郭 P5N		断面四角形を呈す	P5N 斜面2層
"	-11	3郭 P8N		断面四角形を呈す	P8N 2層
"	-12	3郭 P7S		下端の重なった部分は断面で見る限り接合していたとは考えられない。	P7S 斜面2層
戸締り金具	-13	2郭 P4N		断面四角形を呈す	14とて1組 P4N 2層
"	-14	2郭 P4N		断面四角形を呈す。	13とて1組 P4N 2層
不明鉄器	-15	2郭 P6N	厚さ0.25~0.35	両側端が体部中央とは反対方向に折れ曲っている。中央に紐を通すためか穿穴。	片側端欠失 P6N 2層
"	-16	2郭 P4N		断面重みのある六角形。中央部がやや太く両端で細くなる。	両側端を欠失 P4N 斜面2層

銅製品

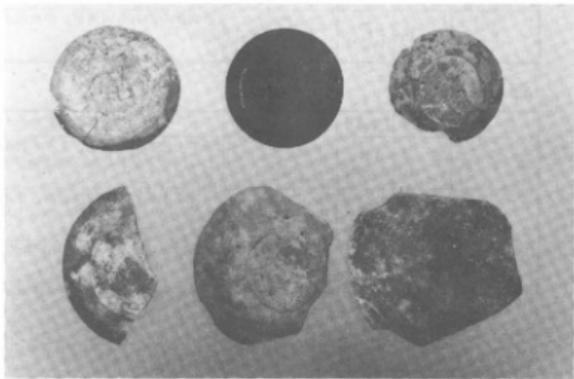
器種	排図番号	図版番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
錫金具	第14 -17	2郭 P4N		鍍の一種と思われる。2本の脚部は頭に埋め込まれておき、長さが異なる。脚は先が尖っており、断面略四角形。	P4N 2層
"	-18	3郭 P8N	幅 横 6.6 厚さ 0.07~0.09	下端は直線。その他は曲線。下端を除き表面側縁部に金箔がめぐる。中央部や上よりのところに穿孔。裏側よりの盛り上がりがある。	P8N 2層
"	-19	2郭 P4N		表面全体に金箔。留め釘用穴が2つ。	片側端を欠失 P4N 2層



図版 1 染付（外面）



図版 2 染付（内面）

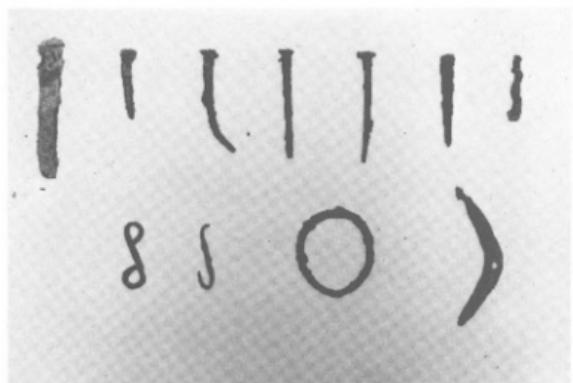


図版 3 土質質土器底部
(糸切りとヘラ切り)

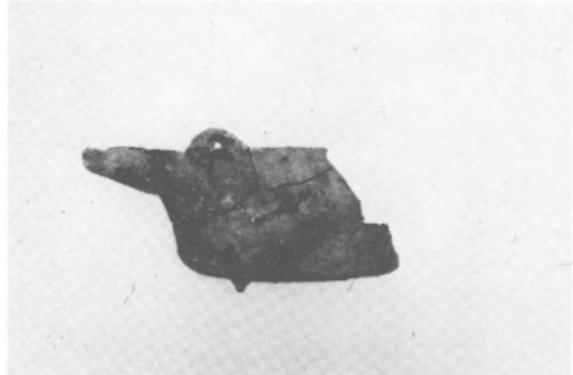
図版 4 雁股鎌・刀子・切羽



図版 5 钉・戸締り金具・
不明鉄器

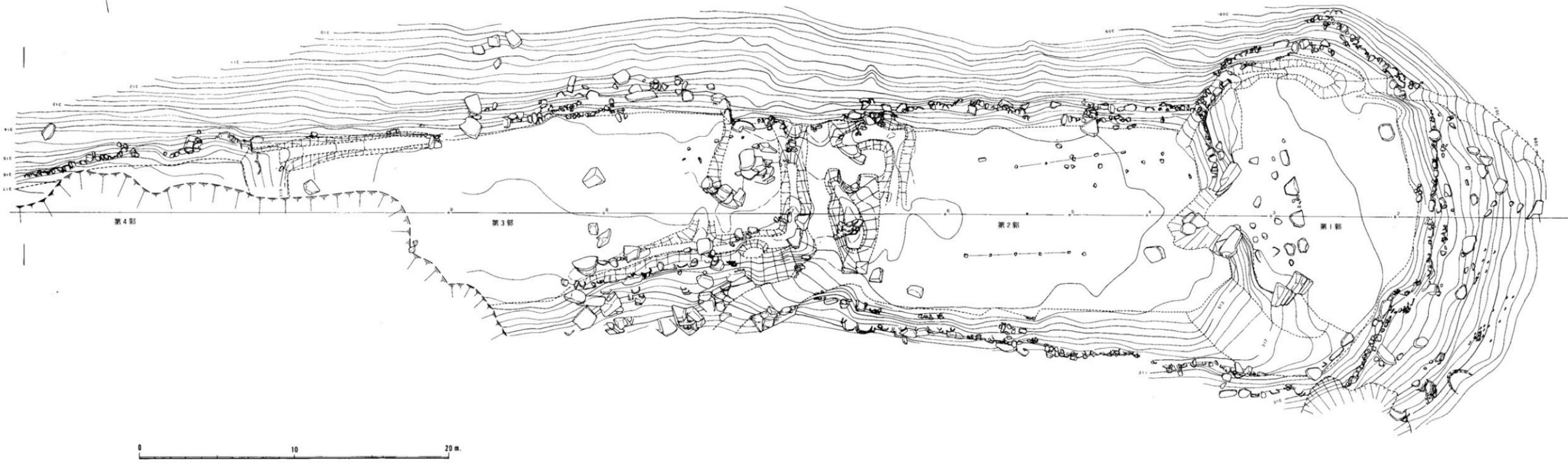


図版 6 鉄 鍋



N
1. N

付図 I 天霧城跡東方尾根調査区東部



付図2 天霧城跡東方尾根調査区西部



天霧城跡発掘調査概報

—香川県善通寺市・多度津町・三野町所在の
中世山城の調査—

発行日 1997年3月31日

編集・発行 一市二町天霧城跡保存会

印 刷 所 (株)西山印刷所

多度津町

(この冊子は、1982年3月31日、香川県教育委員会・天霧城跡発掘調査団が編集・発行したものを許可を得て、再版したものである。)